

<論文>もう一つの季節と城：中蘭英助『北京飯店 旧館にて』論

著者	立石 伯
雑誌名	日本文學誌要
巻	50
ページ	85-92
発行年	1994-07-09
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019767

もう一つの季節と城

——中蘭英助『北京飯店旧館にて』論——

立 石 伯

中蘭英助の近著に『わが北京留恋の記』（九四年）がある。この優れたエッセイ集の第一部は、『北京飯店旧館にて』（九二年）と対になっている。断るまでもなく、『北京飯店旧館にて』自体、『彷徨のとき』（五七年初版、九三年定本刊行）『夜よシンバルをうち鳴らせ』（六七年）とともに所謂氏の北京三部作と呼ぶべき作品である。

右に書題を掲げた初期二作品は、いささか刊行の時期が隔たっているとはいえ、『北京飯店旧館にて』の世界に流れ込み、またそこから九一年以降に執筆されつつある「偽北京人」「北京の貝殻」「瀨生」「燕京八景」などへと流れ出している。つまり、このテーマの新しい作品群が完成すると、北京カルテットということになるはずである。北京を巡る氏の追究は、あたかも滔滔たる大河の流れを髣髴とさせる。氏の対象凝視力の強靱さがどのような性質を持つものかを明かすことにはかならない。

『北京飯店旧館にて』が九二年度の読売文学賞を受賞したおり、氏は城壁に囲まれた北京の横丁である胡同で同じ空気を吸ったもの

の間で成立する友情について語った。つまり、日中戦争下の当時、加害者と被害者という立場を越えた人間同士の激しいぶつかりあいがあったと思われるとして、自己と中国人の友人の関係を省察しつつ、「中国 わが痛みと愛」で次のように述べている。

「攻め込んだ側の人間として、いったい、敵味方の間に友情は成立し得るものであろうか、ということを追究しようとしたものでした。（中略）」

袁犀は戦後の新しい中国でも李克異という筆名で大いに期待された作家でありましたが、大東亜文学賞をもらったために漢奸文士とされ、文革時代の永い迫害がもとで名誉回復の恵みを味わうひまもなく、一九七九年に病死してしまいました。彼が当時書いた受賞作の『貝殻』をふくめた作品集も、遺作の出版とともに、昨今ようやく復刻されてきております。

それは、日本軍の中国における占領時代、占領地区だった北京に踏みとどまった作家たちの文学上の業績をも、分けへだてなく再評価されるべきだということ、すなわち歴史に空白ある

べからずという時代が、ようやくきたからでありましょう。
(中略)

杜甫の有名な言葉に、『人生七十古来稀なり』とありますが、杜甫も友人も、満六十の華甲に満たずして死にました。ついでに申しそえますと、もう一人の友だちの演劇人陸柏年は、私の同国人である憲兵隊員に抗日の容疑で捕えられて終戦直前に上海で獄死したと知らされましたが、而立三十にも満たずして死んだ彼のため、指一本さし出して支えてやることのできなかったこと思い出します。」

長い引用を敢えてした所以は、この挨拶を受賞会場で聴き、大変深い感銘を受けたことを再認するためである。中蘭英助は、袁犀と陸柏年についてこれまでさまざまに語ってきたが、小説による感動とまた一味異った響きが込められていたように感じたからでもある。これを一言でいえば、作家である以前に、まず人間であらねばならぬ、という自戒の言葉にはかならないのである。

そして、ほかでもなく、右の考え方を小説世界に昇華した核心の一つが、『北京飯店旧館にて』に収斂されていることは、改めて断るまでもあるまい。私達は、この書物の扉を開けた途端に、この作品のテーマが遠くのほうから遠雷のごとく微かに鳴り響いてくるのを感じる。それは死者と生者を隔てることのない、人間的感性の重視と信頼の大切さを端的に語ったものである。また、歴史の無慈悲さに対する憤りとともに、歴史が時折見せる真実の顔に対する力よわきものの祈願でもある。この書物の扉に、エピグラフとして高適の「董大に別る」——愁うる莫れ 前路知己無きを 天下 誰人か君を識らざらん——があり、献辞に——いまは亡き友 LとYに捧

ぐ——がある所以である。Lは陸柏年(Lu・bainian)、Yは袁犀(Yuan・xi)である。

作者中蘭英助は、三十七年に北京遊学を志し、また漠然たる自由を求めて長春に渡り、四六年に天津引揚收容所を引揚げるまでの凡そ九年間少し、日中戦争と太平洋戦争下の中国で過ごした。十六歳から二五歳までの多感な時期、最も貴重な青春の形成期である。いわば氏の青春は中国という空間の中で、その空気を吸いながら育まれていったことができる。そして、この時期はもっとも酷しい戦争の時代であり、中国の転形期でもあり、世界の動乱の時でもあった。常套的な表現をすれば、ここは氏のもっとも厳しい訓練と修業を求められた酷薄な大学にほかならなかったのである。解放前のこの時期に城壁に囲まれた古都北京の胡同で青春を送った中蘭英助の独自性はその文学に一定の彩りを添えていることはいうまでもないことである。いや、この恐るべき空間は、いかに青春を豊かなものにしたとはいえ、幸運というよりもやはり不幸であり、悪運でもあった。にもかかわらず、この悪運を敗戦後の日本で何十年もかかって変質、あるいは転倒させようとし、そして現在一定のところまで変えてきつつあることは、文学者、小説家として高く評価されてしかるべき努力だといいたい。

いいかえれば、四二年振りの八七年にこれまで避けてきた中国の上海、北京を再訪した氏は、いわば半世紀近く中国に呪縛されてきた総体の在り様を沈思しつつ、嘗て歩んだ街々、胡同、公園、市場や建物をめぐるあるいた。これはいわば、意図せざる一種の地獄巡りである。また失われたものを探しだす、あるいはそこに埋もれている嘗ての自己の影を求めての旅だともいえた。一木一草が懐

かしいという中国への旅の当初の意図は、街歩きにおいて無残にも碎かれてしまう。そこに浮かび上がるのは、嘗ての青年期の自己や戦争下の北京ではなく、恐らく見も知らない異質の街であり、人々であったはずだからである。自己そのものの戦後の人生と作家としての闘いがその中には投げこまれる結果となっているし、日中のさまざまな関係も影を落しているはずである。

いわば半世紀ほどの長い長いあいだ積みかさなった時間の呪縛を一枚一枚剥いでいくことにほかならなかった。そうすると、思いもよらず自分にも隠されている街と人と、さらには嘗ての時代そのものや幽鬼のような仮象世界が立ち現れてきたはずである。その凝視は大きくいえば、自己の戦後の四十数年、日中間、特に中国革命政権成立前後からそれ以降の關係の省察であり、同時に具体的な一つ一つの事物や人々の中に自分の真実と幻影を透視することだともいえる。

そのとき、自分の依拠できるものは何か、と問わねばならない。自分が生きていてここに在ることは疑いないにしても、しかしこの自己とは何か。七十歳を間もなく迎えようとしている自己が自己として成り立つことは、どういうことであるのか。記憶か、何かの史料か、事物の確乎たる現存か、人間の關係性のなかに隠されている微妙な変質作用か——こうしたさまざまな問いと存在仕方の未知と溝を埋めていかねばならない。そして、ほかでもなく、この作業こそが、『北京飯店旧館にて』を書くことであった。

従って、この作品の表現位相は、三十代と四十代の後半に執筆された『彷徨のとき』『夜よシンバルをうち鳴らせ』とは異っているといわねばならない。というのも、この二作品は、作者の人生には

極めて切実であり、身を切られるような生々しいものであった。そして、一面ではあくまでも記憶のなかの出来事の独自の再生作用であり、変容するものの自己追認と自らの闘いに向かつての自己投企だったということが出来る。そこにはもとより、自己と対象に潜む真実があり、人間としてのある願ひもこめられている。それを一語でいってしまうえば、戦後に生き延びている自己というものの在り方と意味の追究である。それがすくなくとも、氏の当時の書く意味であって、自己追究であることにかわりはなく、両作は自己探究というその要請によく応えているのである。

しかしながら、『北京飯店旧館にて』は、たしかに、相似の発想で書きつがれた一種の連作小説のようにみえるにしても、これから分析していくように、相当異った表現形態があちこちに覗見されるはずである。北京トリオたる所以は、むしろこの表現方法上の飛び越しにくい深い淵のような差異があるために、一種の転調による異質世界の開示として独自の光を放つようになる故である。それをここではひとまず記憶の呪縛からの解放の在り方、すなわち別の呪縛についての強い自覚なのだと捉えておきたい。そして、氏の作家としての回生は、この自己の足取りを辿るスペクトル線上に輝くようになるものである。

執筆当時、七十歳になろうとする作家に対して、回生という言葉でその作品世界の在り方を云々しようとすることは、些か不用意であり、僭越であるかも知れぬ。けれども、作家が、自己と世界の闘いに迷いこんで、そのなかから絶えざる精神の闘いによって、自分と世界に微かであれ、一条の光を照らし出そうとするものであるとすれば、氏はまさしくそのような書く行為をここに垣間見せている。

もとより、読者には、多くのものが隠されていて、作品のなかの何を聞き取るかは、個々の読者によって奇妙にずれてくるものである。しかしながら、そのなかに、作者の真摯で強烈な魂の叫び声を聴き取ることはできる。あるいは、作者の世界との係り方を熟知することはできる。これは四十数年間の『とき』を閲した眼差しと精神の相の深まりを、行間に読み取ることができるからである。つまり、回生とは、古稀を迎えた作家の、青春の新しい発見だというであろう。

中園英助は、評論集の書題に「留恋」という言葉を選んだが、氏において北京は、まさしく恋いわたる対象であった。しかし、それは「攻め込んだ側に連なる者の原罪体験と日中関係史」（「あとがき」）の海に泳ぎ出ることであった。中国は、「滅亡について」で武田泰淳がいうように、「数回の離縁、数回の姦淫によって、複雑な成熟した情欲を育まれた女体」のような強靱な発光体として、控えていた。中国において「処女を失って青ざめた日本の文化人」としての氏等は、精神と肉体上の厳しい試練に巻き込まれざるを得なかった。この試練に対する忍耐あるために、武田泰淳や中園英助らの文学が成立したことは、改めていう必要はない。

彼等にとって、その文学の核心は、対象を徹底的に凝視することであった。この努力と忍耐は、氏等が、戦後の日本を罪の自覚や未知の巨大な隠された力の予覚というある強烈な意識を内在化させつつ文学者として生きることであり、日中の文学の諸相を血を流しながら凝視することを意味した。そのため、中国の抗日戦期、解放前と解放後の政治的な錯誤やジグザグ、文化大革命の安易な批判を排そうとしたのも当然至極のことである。極端ないいかたをすれば、

政治や経済の動向などそれほど意味があるわけではない。《精神の血債》こそが問題なのである。右の評論集の結語というべき「文学的淪陷区からの再誕」において次のように主張するのも解りやすい消息だといえよう。「文学者にとって清算さるべき精神の血債はといえば、単に会って政治的なエールをかわすことではない。中国の作家が書き、また書かれるべきであった、作品世界の、それは戦後日本そのものでもある重層的な謎に満ちた『淪陷区』の過去および現在を相互に表現することによって、清算する手がかりが得られるのではなからうか。」それが、氏の指摘するように竹内好のいう日中文学の「全き会同を未来に待つ確信」（『中国文学』一九四二・一）ということの意味でもあろう。

つまり、『北京飯店旧館にて』が淪陷区としての北京の民衆、知識人、文学者にこだわり続けるのも、漢奸の汚名を蒙って、ことあるごとに迫害され、命を落し、自殺した多くの人々についての罪障意識のしからしめるところである。さらには日本それ自体が占領という一種の淪陷区を体験しつつあるにもかかわらずそれに自覚的でないこと、その故に戦後史に重大な欠落を見せていることなどに氏は気づいていたのである。自分は、そして他の人間たちも西洋的世界に拝跪する無自覚な「漢奸」に類するものではないか、と。そして、氏の困難は、武田泰淳や竹内好らがそうであったように、罪障意識などでは何事も解決しないことを身に染みて知っていることである。この自覚はともかく、生きていくことが容易でないことを暗示する。従って、氏はこの生きにくい戦後を生き凌いで、ようやく自分を説得して、上海、北京に舞い戻ったとき、その違和感から書きはじめねばならなかったのだ。このようなよく解らぬ条件を受け

入れて、北京の現在を余すところなく体験し直さなければならぬことの告知を受け取ったのであった。いいかえれば、「老北京人」として舞い戻った北京で、自己の幻想を追い払い、新たに北京と北京人と中国のイメージを形成し直すことが要求された。この要請に対する努力が、この連作小説を書く意味でもあった。

『北京飯店旧館にて』は、無くしたものの、奪われたものの、消えたものなどに対する哀惜の情を吐露することではなく、現代の北京、中国を通して、彼の中に積み重なっている四十数年間の時間のさまざまな層のもっとも大切な構造を蘇らせる営みである。それまで心を疼かせつつ避け続けていた中国に、そして「静心もて」行くことができなかった都市に、「鳩笛」の呼び掛けでなぜ行くことになったのか。それは恐らく天啓のようなものであり、一挙に心のうちに水解する隠された動機があつて、出掛けることになるのも、無自覚のうちに、作品を書くべき準備ができていたことを明かすものだといえる。老舎の『茶館』は、彼の敬愛する作家の芝居であり、懐かしいイメージを喚起するものでもあるとともに、氏を北京にまねきよせる呼び笛であり、甘い誘い水でもあった。

その都市に行く理由は、一九三〇年代から四〇年代にかけての中国民衆文化の現地探訪のテレビ番組の予備取材のためであれ、他の理由であれ、彼にはいっそう構わない。そこに行くだけの理由が、他人に説明できればいいだけだろう。心のうちには、確乎たる意志が秘められている。要は、中国の『北京』でありさえすればよいのだ。ところが、北京は既にして嘗ての北京ではない。空港から車に乗って近づく街は、主人公の「私」に異相を見せはじめる。「これは北京じゃない。」自分の内部にしまわれていたものとは、まった

く違った都市への迷路をこれから彼は辿り始めざるを得ないのである。北京の象徴であつた城壁はない、造り替えられた街路、壊された胡同、消えた河、湖、建物、広場などすべてが違和感と隔絶感のものである。確かに、城壁の一部は廃墟のようにのこっている。しかし、それが一体何ほどのものであるのか。自分の脳髓、皮膚に残存していたはずのものは、すべて跡形もなくすっかり消えている。あるいは、建て変えられるために廃墟になっていたり、瓦礫の山と化している。北京ではない、という呟きはそここの街角で、物にぶつかるとに消えることがなく湧き出してくる。「無為を楽しむ茶席が消えてしまったらいい」と考えると、覚悟していたこととはいえ、やはり脚をなぎ払われたようだった。北京へやってきておぼえた最も深い喪失感である。」もとより嘗ての友人もいないし、その行方はようとして知れない。当時にあつても、そして現在も自分自身の最も大切なものを失ってしまっている。「そこには、うちひしがれて降りてくる二十五歳のわたし自身がいた。親日だったのか、抗日だったのか、それさえ確定し得ぬまま、ただ一人の中国人の親友を喪った日本人の青春は、あの日終わったのである。」ただにくした青春だけの明確な自覚は痛いほどに蘇る。これはマルセル・ブルーストの『失われたときを求めて』の主人公の喪失感と同質の辛い体験である。

この喪失感、自己の過去が一切、夢幻のものであり、あるいは否定されていることを意味するのではないか。少くとも現在と過去の間には大いなる断絶があつて、過去と現在を繋ぐ肝腎な糸がぶつかりと途切れていて、もはや回路が繋ぎ得ないのではないかという不安と危機意識をもたらすものである。酒場や喫茶店や食堂といっ

た、若き日の数々の愚行や大事な思い出のもとである場所、あるいは新聞社や「燕京文学」という同人雑誌を発行していた部屋など、さらにはそれらを包摂する胡同と生活の足跡は、きれいに拭い清められている。これがあの革命であり、人民の求めた生活の変革であるのか。そして、この都市の変貌はなんと形容すべきか。おまえのいる場所など、この北京にはないのだと宣告されたのである。だからこそ彼は、北京のあちこちを歩き回って、自分自身の求めたものと、北京の真実の姿を探さねばならない。しかし、北京はその象徴である城壁を既にして失っている。「不安は、北京にいま滞在しているのに、城外から城外を動き回っているという、かつては考えられなかった違和感からきていたのだろうか。」かつての古書籍店主は、北京人の規定を、城壁の中で生まれ、一生暮らし、そこから一歩も出たことのない人だといった。しかし、現在城壁のあとは環状道路と化している。記憶の中では生き生きと動く多くのものが、現在という時間の果てで、ただ只管、彼から逃げ去るように姿を隠すのである。

彼が過去と現在を明確に区別しているのに、すべては、意識の内部で隔絶をもたらすようにしか作用しない。彼が見たと思ったものが、幻ではない事態が頻発する。「哈達門を見てきたと答えた。すると服務員は、哈達門は壊されてもうないはずだが、あなたは門の幽霊でも見たのじゃありませんか」といって笑った。「自分自身では確実な存在だとも思うものでも、多くのものは消え去っている、「そんなもの、ありません」「夢を見ているのでしょうか……」。多くの記憶の在り様と現在のものの喪失の様がこのような記述でうまっている。だから彼は、例えば、記憶の中にのこり、そして全然

名前さえ忘れていた建物で、現在もここに残っている煉瓦塀を五本の指の爪で削る。「ほんの申し訳だけでも、失ったものを取り返せるといふように、塀がつきるまで爪を突き立てて歩いた。」このような代償行為で、なんとか自己を取り戻そうとせざるをえない。

すでに示唆したように、彼の内面に生きていたものと、現実の乖離こそ、嘗ての彼の北京生活を浮彫りにする生の形であり、敗戦後の日本で四十数年間生きた別の生の形である。この二つを結ぶ形のない形、前後の脈絡の辿りえない構造が、彼の実存の意味だといえる。引揚げ船で帰国しなければ、北京や中国でもっと豊かな生や芸術生活を創り上げたかもしれないというよりも、北京と東京の生活の刻下の二重の相が、時を隔てて、白昼に照らし出されたのである。彼の北京の街々の彷徨は、過去の自分と北京、現在の自分と北京の厚く固い壁を切り崩す蟻穴の模索であり、幽霊的なものと化したものの回復の願いにほかならない。いわば、断ち切られた二つのものを何とか繋いでいこうとする試みである。

文化大革命による袁犀や老舎など多くの作家や芸術家の非業の死を始めとして、非体制的な民衆や時代に取り残された人々の苦しみなどが、単に解放後の中国中央政府の政治指針や戦略のある誤りに起因するばかりでなく、解放以前の、特に日中戦争下の日本の軍、警察などを始めとする侵略的行為にも深い係りがあると考えている彼であるために、戦中と解放前、解放後、文革期、その後の混乱などが幾層にもなって、物と人の中に堆積しているのである。

彼は、自分の中に流れる時間をひとつの歴史として構成し直す。たとえば彼を北京に呼び寄せることの一因になった、老舎の死因を追尋する。「つたえられる通り、老舎が太平湖に入水して自殺した

とするならば、老舎は北京の旧城壁をへだてた城外で死んだことになる。そんなことが考えられるだろうか。」かつての積水潭は太平湖となり、そこも老舎や彼を慕う迫害された多くの人をその底にのみこんで、今は地上から姿を消している。老舎は、日中戦争のために、武漢に赴いたのではなかったか。その後、ずっといい作品を書いてきた。ところが、文革初期に「北京文芸」の編集責任者として、掲載作品について使噓者達から指弾され、ついに死を選んだのではなかったか。老舎ですらそうである、もっと解りにくい「長城謡」「何日君再来」の作曲家劉雪庵などの場合、その死は、謎と闇に隠されている。「寒鴉のタンゴ」一篇は、中蘭英助の『何日君再来物語』で展開された作曲家を取り巻く謎と時代の闇の諸相をなぞりながらも、この連作の中でしか書かれない形でうまく息づいているのである。

謎や闇ということであれば、かつて自分を取り巻いていた多くのものがそうではないか、という感慨がある。世話をしてくれた陳牧民の小学教師を辞めた理由も解らない。彼は彼なりの論理で推量してみる、するところなる。「日本軍が公然と華北を支配するようになり、教育方針もすっかり変えられたその年、すなわち一九三七年夏の蘆溝橋事件による日本軍北京占領が原因ではないかと信ずるようになった。」これは推量である。しかし、彼にとっては身を切られるような人間性と事物についての関係性の認識である。すべてがそうだ。魯迅旧居とその胡同の佇まいも、そこに住んでいた魯迅の第一夫人の朱安もその旧居から影も形もなく抹殺されている。だから、家も人も姿を任意に変える。四十年前の三年間、住んでいた家をようやくの思いで探しあてた。しかし、その家には、現在別人が

住んでいるにもかかわらず、彼にはかつての牧民が住んでいるように錯覚される。家も人も幽霊かも知れない、思いは乱れざるを得ないのである。

「青島ヒールの酔いに身をまかせながら、太廟の側から見たベントハウスの画室の窓を、わたしは幻のように想い描いていた。帰りぎわにもう一度、飛龍橋胡同に舞いもどり、もとの第十三号を中心とそのあたりの家屋をしばらく望見したが、ついに屋上屋のある家を発見することはできなかった。だが、反対側から実見したのだという記憶を消すことはできなかったのである。『四十何年目の幽霊だよ。出るからには、場所をえらぶだろうからね』」

この場所とは、彼の心の内にぽっかりと空いた虚の空間であり、北京のそれであり、虚実の向こうに存在するブラックホールに似たある場所をいうのではないか。時間と空間を超越したいと想いつつも、超越の不可能なある位相だということしかできないような。いかえれば、想像世界のなかの地獄に類するもの、人を冥界に導く境界の彼方かもしれない。だからこそ、そう、忘却の彼方にあるものを、その淵から掬い上げなければならぬ。彼が、批判に晒されて逼塞している人物から、「あなたは逆のこと、陸柏年を忘却の地獄からひき出そうとしているのでしょ」と指摘されるのも、故なことではない。というよりも、『忘却の地獄』にあるものを日のもとに出すことが、自己の内面の闇に光を当てることと等価のものだという予感を抱いているからである。彼が、トルキスタン臨時政府を開設した將軍を新疆会館に尋ねたことを思い出し、その場所を探し回っている時、冗談ともなく、次のようにいうのも深い意味が

隠されている。『明日、日本へ帰るのが厭になったからだけど、新しい北京ではやっぱり自分が邪魔物のような気がして、新疆省へ行く隊商に加えてもらおうと思ひ、それで新疆会館を探していたところですがね』。この時空からの脱出の願ひこそ、ほかでもないこの北京が促したものである。

彼は、もとより、北海公園の蓮の葉や山査子の赤い実に飴をまぶした山裏紅の味は昔のままであることも承知している。だが、現在の北京に決定的な違和感を抱きつづけるのである。それは、『忘却の地獄』に沈みこんでいるものが多い上に、思ひ出されることが、いろいろな面から絶望的でもありそうだからである。自分の力はそれほど強くない、せいぜい数人の友人の事跡の一端を書くことによって忘却の淵からすくい上げる程度のことにはすぎない。歴史の強大な力に対するこの無力感と、大いなる喪失感がないまぜになつて、彼の身を苛むのである。

彼は青年のときからこの街にアンビヴァレントな感情を抱いていた。自由の思いと憧れを持ちつつもひどい疎外感を感じていた。「要するに、いつもここから遁走することばかり夢見ていたんですから」。このように自虐的にいうにしても、何ひとつ友人達のためにできなかった自分の在り様を、この都市で、そこを一つの煉獄として身を焼きつつ験さねばならなかったのである。自分には何ができたのか、そして今、さらには将来のことにしてなにができるのか、と。この堪え難い試練をこの都市が目に見えない形で彼に強いるのである。逃げ出したいけれども、いなければならぬ、あるいはその逆——この関係の地獄が北京にはかならないのである。上海を魔都と呼ぶ意味ではなく、彼には北京は『魔都』である。あるいは夢

魔の街であり、幽鬼の街である。身を振り遠ざかりたいと感じながらも、間近で体臭や息遣いを感じる形で『留恋』せざるを得ない都市なのである。

中蘭英助は『北京飯店旧館にて』で右に述べた仔細を細かな事物と記憶を渾然一体と化して、見事に描出した。それが冒頭に述べたように、北京三部作のうちでも新たな突出した表出位相を占める所以である。

つまり、氏は北京や中国人などについて語りながら、同時に自己を、敗戦後の日本人と日本をも語っているのである。この重層構造の在り方と意味と価値を透視しようとする点に、氏の作家としての冒険があり、誠実な闘いが存するのである。したがって、「瀕生」や「燕京八景」などの新作の狙いとその作品の背景が、北京・中国よりも東京・日本であるのも自明のこととなる。その渦巻く世界のなかで日本人・中国人、日本・中国の人間の・文学的な問題を解き明かそうとするのである。いわば、第二次天安門事件や現代の動向などをも含む現代的な課題が、対象となり、視野に入れられつつ、追究されていくのである。これは、氏が九年間暮らした中国での体験が裏打ちされているのであり、その体験と現代の問題が交錯する形で明らかにされようとする点に氏の文学の独自性と現代的な意味が浮彫りにされているのである。

とまれ、『北京飯店旧館にて』の世界は、過去の氏の文業を受け継ぎつつ新しい形へと転換する営みである。それが同時に、「燕京八景」「偽北京人」などの新しい世界を促す発条であり、そこに過去・現在・未来を渾融させていく構造が、氏の精神の現在の闘いの形にほかならない。

(たていし はく・文学部教授)